

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別取扱承認第三五二號
昭和二十七年五月廿五日印刷 昭和二十七年六月一日發行

第十八卷 第六號

浄土

六月號

佛 ころ 大野法道

僧堂から鳥の世界に 中西悟堂

曲戲京の時雨 吉田絃二郎

阿彌陀經の話 藤井實應

1952

6

宗教家たるもの

現在は心理學萬能の時代。戦争中、兵科選別のために直接検査をうけた経験は吾々が自らすごした體驗であつた。人間の知能が數學で現わされるようになったては、ごまかしはきかなくなる。

ところで、宗教家はどうか。筆者がひもどいた新しい心理學書に掲げられている圖表によると、宗教家、特に管長級、キリスト教でいうと司教級になれる人は、知能指數百を一人前の知能として一三一以上。即ち一人前半以上でなければならず、百人中のパーセンテージは僅かに三人である。その教育程度は「大學において優秀な成績をあげ得る能力」の者に限る。無論、吾々は管長などは思いもよらぬせめて普通の宗教家たらんとしているのだが、それでもこれになるにはというと、これは知能指數一三〇——一一八で百人中で十人、大學で平均的成績をあげ得る能力のある者でなければならぬ。

昔は、頭がよい、學問のしたい、家柄のよい、そのような者が、「それならこの子は坊さんにしよう」というわけで僧門に入るのが通例であつた。坊さんといえは、物知りであり、そのいうところには人々は皆隨順する丈けの貫録があつた。知能指數一三一以上だつたからである。

これにひきかえて現在はいやむしろ吾々自身、管長たらずとも、少くとも宗教家たらんとする者、一三〇から一一八、といえはまづ一般人百よりは上を行かねばならぬのだが、このところ、どんなものだろう。

私自身にかえりみて、數字で示めされる恐ろしさがつくづく感じられて来る。(竹中)

目次

花がたみ……………吉田絃二郎(1)

アメリカ二世の信仰……………白井憲成(12)

京の時雨……………吉田絃二郎(27)

法然……………東山未知夫(10)

だんらんの日……………田邊獅子藏(8)

阿彌陀經の話……………藤井實應(15)

地獄極樂どこにあるか……………藤田寛海(18)

稱念上人……………大橋俊雄(23)

佛ごころ……………大野法道(6)

僧堂から鳥の世界へ……………中西悟堂(3)



花 が た み

吉田 絃二郎

今年は三月のなかばから庭の小藪に来て鳴きはじめて、もう四月も末に近いにまだ鳴きつゞけてゐる。わたくしが武蔵野に住むやうになつてから二十幾年になるがこの春ほど多く鶯の鳴く音を聞いたことはない。毎朝東の空が白むころになれば前の庭、裏の竹山、隣りさかいの小藪といふ態に、二ヶ所も三ヶ所もで一時に鳴きはじめる。

夢見心地にあけぼの、鶯を聴くなどといふことを、もつたいないことに思つてはなほも雨戸をしめたまゝ、鶯を聴いてゐる。

わたくしは鶯を聴く毎に、かつて逢つたスコットランド出身のコックス教授の言葉を想ひ起こす。教授は若いころは印度駐在の英國聯隊の士官であり、また世界各國を漫遊したコスモポリタンであつた。かれは北海道にゐたころは郭公を放し飼ひにして櫻の毛蟲を捕

らせほとんど不可能のやうに考へられてゐるみそさゞいの餌付けを上手に果たすほどの腕前を持つてゐたほどだから教授の小鳥に關する批評は信じていゝと思ふ。いつであつたかコックスさんは日本の鶯の話をして「鶯は小鳥の王ですよ」と語つたことがあつた。もう三十年も前のことであるが、今もなほ鶯を聴く毎に思ひ出す言葉である。

思へばその鶯の鳴く音に朝毎の夢を破られるのであるから、まことにありがたいわけである。

數年前の戦時中は一朝でも落ちついて鶯の音を聴くこともできなかつた。空襲警報のサイレンにつゞいて鶯の鳴いてゐる裏の竹藪には、高射砲の破片が無氣味な音を立て、散つて行つた。

明日の世界に對する不安はあるにしても、今日の一日は先づ落ちついて鶯を聴くことができる。

このありがたさをしみじみと感ずるところに、わたくしたちの救ひがあり、このありがたさを感ず得ない時わたくしたちは救ひの手から洩れる。

今も何處ぞへ行つたら花筐を賣つてゐるところがあるであらう。わたくしたちが子供のころは、花のところになると、花かごと呼ばれて、村の小店でよく賣つてゐたものである。

竹を割つてこしらえたものもあり、經木を赤青紫などに染めたものを編んで作つたものもある。二三年前伊豆に旅したをり店頭にその花かごとを見て子供のころのことを思ひ出した。

このごろ良寛さまの物を読んでゐたら、その花筐のことが記されてあつたので、ふたゝび田舎の花のころを憶ひ出した。

良寛さまが高野山から吉野を歩かれたのは今から百四五十年も前のことであらう。

父の以南といふ人が京都の桂川で身を投げて死んだ。六十一歳であつた。

死因もはつきりせず、またつひに死骸も見つけられ

なかつたので……、それに殘された歌から判斷して、以南は高野山に身をかくしたといふ人もあり、良寛さまは、父をたづねて紀州路から大和路の旅をつづけたらしい。その旅の吉野紀行のくだりであるが、吉野を下つて、ふもとの里に泊つた時の話である。

そのころ貧僧の一人旅のことゝて、たいていは何處の家も泊めてはくれず、森の下かけや、路の芝草をしとねとして寝るのが、常であつたが、その夜は幸い貧しい家の屋根の下にやすむことができた。疊とてもない床の上に夜の物もないまゝに筵にくるまつてやすんだが寒くて眠れない。見ると、家の主は松を焚いた燈の下でしきりに物をこしらえてゐる。何をこしらえてござるのかと良寛さまがたづねると、家の主の答へはかうであつた……わたくしは花筐をこしらえてをります。これは吉野の花がたみと申して、藏王菩薩が吉野の散る花をあはれにおぼしめして、この花筐にお拾ひあそばすのでございます……」

良寛さまの旅日記に書かれた花筐の一駒である。

鶯は、この原稿をしたゝめてゐる間も鳴いてゐる。しかし花は疾うに散つて春はゆく。このごろ市川三升氏と會して行く春の句を案じて成らず、今日ふと思ひ出づるまゝに

行く春に残されおはす佛かな

僧堂から

鳥の世界へ



中西悟堂

美しき自然へ

私は名前の示すように今でも僧籍にあり、もと／＼二ヶ寺もの住職であつたのです。それがどうして、こんなに鳥の研究家として一家をなすに到つたかと申しますと、當時、僧

堂にあつた時、僧侶は口には符牒のように三界の大導師と云ひながら、余りにも恥かしい面が多く、自責の念にたえられなかつたからです。こゝにいては、周囲の人も、檀家の人も住職を大事にして偽善に迫いやる、これでは人間の本来の面目、ひいては大自然の眞の

姿、人としての道が、反つて本當に求められないのではないかと。と、こう反省しまして思ひついたのが、鳥の世界でした。

こゝでは、小ざかしい智恵もなく、又、偽善もありません、たゞ自然の本能のまゝに自由にあつて、しかも調和がとれていて美しい。又、こう考えをめぐらさなくても、山野に飛びかひ、鳴きかわす彼等の生活そのものには限りのない美しさを見出すのです。自然の詩といえましょう。

私が大學が駒澤に移つた時分、よく近所の山林に出かけていつて、鳥の聲を聞いたり、眺めたりしていました。このようにもと／＼鳥が好きだつたことも手傳つて、とう／＼現在の鳥と共に三十余年の私の生活が初まり、専門となつてしまいました。

蛇を育て 鳥を飼う

そこでいろ／＼と山野に出かけて鳥の世界を見て廻つたのです。しかし、野生のまゝでは、なか／＼産卵その他詳しいことがわからないので、家で卵なり、雛から育て、観察をはじめたのです。

その一つとして、蛇さへも飼つたのです。

私の部屋に大きな木箱をいれて砂を盛り、土管を埋めて蛇を養いました。三十匹ほどになりましたが、おかげで、私は、蛇の産卵、脱皮からすべての生態を、すつかり、研究することができたのです。

日本の子供は蛇という恐怖と面白さと半々で、石をぶついたりしていじめますが、なか／＼蛇というものは臆病なものです。しかも、表情のないものですが、それだけに可愛がる人に信頼感を持つていることを知りました。たとえば私の部屋へは、めつたに人は氣味わるがつて近づきませんでした。たまに誰かがやつてくると、蛇は、みな私のふとんの下にもぐつてしまうのです。警戒心を持つてゐるわけですね。

鳥の方では、すゞめが最初でした。すゞめというのは、割合に人家に近くなりますが、それだけに人間にいじめられているから、軒端のすゞめをならそうと思つても、急にはなれません。山の鳥の雛が一日でなれるものなら一週間はかゝります。しかし、根氣よくならして飼つておりますと、しまいには親鳥まで

仲よく舞込んで来るありさまです。これも三十二羽までになりました。外へ散歩に出ると群をなして私についてくるのですから壯觀です。

その他、鵲・啄木鳥など、いろいろとやりました。

皆、よく私になつき、慕つてきますが、特に急に慕つて、私が部屋の中を歩くあとから、ちよ／＼くつついてきて踏みそうになる程まで追つてくることがあります。そういう時には、抱き上げてみますと、必ず、いつになく身體が軽く、胸をさぐると胸骨がつき出てやせこけ、大てい三日程で死んでしまします。死期が近づいて心細くなると、何かしら頼ろうという氣が強くなるのでせう。人なら、口に出しますが、鳥には表現できない、それだけに、可愛さも一倍です。

このようにして、鳥をよく知りなつんで参りますと、非常に、人の心を直觀的に反映するものだという事がわかります。

私の心に波がたつていたり、癪癪を起してゐると、鳥の方でもきつと騒いで荒れて、どうにもなりません。必然的に私も、五分なり

十分なり心を調べてから、鳥に相向う事になります。いわば、鳥は、其點では私の心の師匠とも云えましょう。鳥は、何も云いませんが、其自らに、鏡のように相對するものの心の動きや意圖を知る本能を持つています。

鳥を愛せよ

鳥は人の傍において、いろいろ楽しむものよいでしょうが、又、一面、愛鳥は國家的に言つても大きな事です。昭和廿三年には六百五十萬石のバルブが生産され、中、三百二十萬石が赤松黒松の類でしたが、驚くなかれ、其年に害虫によつて損失したものが四百五十萬石に上るのです。害虫驅除にD・D・Tをまいても一時的なものであるし、經濟的にも大へんな費用です。恒久的な鳥による害虫驅除が、何といつても一番です。自然は、それでうまくバランスがとれているのですから、それに従うのが何より永久的な事業であるわけです。D・D・Tをまく人爲的な作業は、害虫も殺すかも知れませんが、害虫を喰う鳥の雛まで殺してしまふ、これでは何にもならない。

愛鳥については、とくに宗教者の關心を喚起したいと思う。

日本では、假に停車場のひさしに、鳥が巢を作つたのを見つけると、悪童どもが、よつて、たかつて、ひきづり降して投げ出すのがよくある例です。所が、米國であつた話では或時、鐵橋を架ける工事の最中に、鐵橋に駒鳥が巢を作つてゐるのを發見して、それを大切に切り除けるため、工事中止の命令が出たという。又、ある飛行場で出發準備を終つた飛行機のエンジンカバーに鳥の巢を見つけたので、その飛行機の出發が延期されたそうです。こういうのは、ごく一例にすぎないのだが、G H Qの野外生物課長オースティン氏に訊ねると、別に學校で教えるわけではないが、そのような事は、キリスト教の影響であらうと答えていました。

そこで、ひるがえつて我國を見ますと、我國寺院の所有林は相當なものです。この寺院の僧侶方が積極的に鳥を愛する大運動を起したら佛教本來の教、慈悲の教を具體的に説く事ともなり、多くの點で、よい結果を齎らすと確信します。私は聲を大にして、特に全國

佛教關係者に御願ひしたいのです。

子供等は巢箱を作つてかけてやりますが、他の子供が、取つたり、盗んだりして旨く行きません。まだ／＼生物を愛する心が行きわたらないからです。學校の社會科で教へるより、寺院で説く方が數等よろしい。しかも、反つて、こういう足もとの所から佛教が出發するのではなからうか。

佛教は足下に

私も今尙、天台四教儀、永平清規は覺えておりますが、結局、そこには高遠な理想があるにすぎない。若い時は、あまりにも理想に燃え、それを追求するに急で足下を忘れていた。佛教というものも、存外身近かに、かんたんな姿であることに気がつきました。鳥をかわいがるといふ一事にも、十分に佛の教が味えると思う。私にとつては、四教儀が私の中で消化されて、現在の形で現われているといえましよう。

人生五十にして再び、こゝから一年生で出發するように思われる。

こざかしいはからいをふりすてゝいけば、

そこから平和な世界が展開しよう。人智はある點では人文を豊かにしてくれるかもしれない。少くとも生老病死の苦の中の病の面は、いくらか改良された。しかし、一面原子爆彈の使用の如き非人道的なものも作る。ところが、鳥の世界は本能のまゝで、人より上手にバランスをとりつゝ繁榮していく。本能とはいゝながら、ある意味では純化された自然である。邪智がない。私が出發點とした彼等の世界の本能の調和については他日改めて申上げるとしますが、とにかく、このような世界にふれてみると人の世界も、その本來の清淨な心に立ちもどれば、きつと美しい世が展開していくのではないか。人は智慧に負けているのだ。(筆者は我國屈指の鳥類研究家)

鶏卵の雌雄を決する法

雛鶏の雌雄を決するのは、日本人の特技とされている。ところで、もし卵のうちにそれが判つたら、さらに好都合であろう。しかも、その見分け方がある。すなわち、雌の卵は丸く、雄の方は少し尖つている。たゞそれだけの話(リブレール)



佛 ご こ ろ

大 野 法 道

此度、講和が實現して、この國が獨り立ちに返ることになり、今までと異つて、「いよく此からだ」という、張切つた心持であります。

しかし又、考えて見ますと、戦後の經營は、まだなか／＼手が届き切らず、大きい問題は山のように積まれている所へむけて、新しい困難な問題が、つぎ／＼に起つて來りして、前途に横たわる難關のある事を痛感します。此間のメーデー後の騒亂なぞは、氷山の一角に過ぎないでしょう。

これを思えば一そう緊張せねばならないはずでありますけれど、そこが人間で、つい「これからだ」という決意が薄らぎがちであり、いつか知らぬ間に消えてしまうことが多いのであります。

ですけれども、「これからだ」という心構えは、人間には最も大切

なもので、之は生きる力の素だと思ふのであります。こうした心構えが、しつかり身についていたら、どのような困難な事に出會つたとて、決して行つまることはないでしょうし、どこまでも生き伸びる樂しみがあると思います。

「佛ごころ」という言葉が佛教にあります。この「佛心」が「これからだ」という心構えを養う事は、何より有力だと思ひます。「佛ごころ」という言葉は、世間でも、時たま使うことがあるようですが、「なさけ深い」とか、「いつくしみ」とか、いうふうに見てゐるようで、おもに困つてゐる人を助けたような場合に使われるようです。これは觀無量壽經という經文に

佛ごころとは大慈悲これなり。無緣のいつくしみを以て、諸の衆生を攝め給ふ

とありますから、大體それでよろしいのでありますが、それだけでは盡きない所があるので、この經文の中に「無縁」というのは、つまり一切の物をどこまでもいつくしみ生かす力が佛の心であります。たと困つてゐる人の場合だけでなく、あらゆる人と物と事柄を生かす力であります。どのような場合にも、決して望みを捨てない心であります。これはまた、盛んに燃える心であり、よりよき優れたものを、願ひ求めて止まぬ心であります。それ故、經文にはこれを佛の「本願」という言葉で説かれて居ります。阿彌陀佛は願を生命とされるから、本願というのであります。

しかも佛は人や物を生かしたいという、唯願望に止るものでなく、生かす事實に、自ら投げ入れ給ふ決誓の佛であります。日常私共が拜讀致します「四誓偈」は、こういうことを説いた經文であります。

こうした「佛ごころ」を、しつかりと、身に受けられた淨土宗の開祖法然上人は、その心持を歌に詠まれました。それは「春」という題でありますが、

さへられぬ光もあるをおしなべて

へだて顔なる朝霞かな

春ともなれば、若物を生かす力が、野にも山にも、村にも町にも、一ぱいに満ちてゐるのを、はつきり見る事ができます。そのように、心の眼を開けば、どこにも誰にも見える生かす力を、なか／＼眼を

あけようとしな、人間の癖のやるせなさ、を詠まれたものと思いますが、こうした、眼をあけようとしな人々をそなわす佛心は、いつまでも盡きることなき、永遠の「之から」と、炎の如く燃え續けられる佛であります。唯今拜讀しました四誓偈の經文の中に「必ず無上道に至らん」という言葉がありました、之を音讀しますと「必至無上道」、必ず至る「必至」。つまり、願力として、どこまでも生きてゐる、という事であります。「冬來りなば春遠からじ」。やはり望みに生きる「必至」の心であります。

今、私達日本人は、苦しいどん底から立ち上つて、是非とも力ある國家に、此國を築きあげねばならない役目を持つてゐる現状であります。出來上つた物を持ちこたえるよりも新らたに造り上げていくことは、苦勞は多いが、その楽しみは亦格別であります。又家庭の人としては、唯暮しにくいという、窮屈な場所に閉ぢ籠つて居らずに、生かす力の佛心を身に受けて、あせる事なく、此「必至」の信念を以て、すべては「之からだ」という心構えのもとに、各自の勤めを勵みつゝ、安らかに然も力強く、日日を暮されますよう、念願して止みません。

淨土宗は、こうした、佛心を身に受ける生活のすべては、念佛にこもるとして、南無阿彌陀佛を申しつゞけるのであります。

一家だんらんの一日

田邊獅子藏

昭和二十七年三月二十三日日曜日（明日彼岸明け）天氣好晴午後西北風。

半月ほど前から本日来るを待ち詫ておりました。それは去二日に悟が叶也宅を訪れた時當二十三日に叶也一家が目黒へ入來するとの傳言がありましたからです。そこで老婆も色々考へて、一月以來裕子も音信がないから、叶也の入來を好機に裕子にも都合出來たら入來するやう發信して呉れといふので去十

三日裕子さん宛發信致しました。其後二十三日を待つ氣持で一杯でした。數日前より老婆がよく話してゐることでしたが、裕子は屹度二十三日に入來するだらうとくり返しておりました。果して老婆の希望が叶へられて、裕子は二十二日の午後に来て呉れましたので、老婆は大喜びでした。自分も五時頃歸りましたが、慈子ちゃんが目立つて發育したのが一番嬉しかった。早速着換へてゴム風船など玩具にして遊んでおりました。七時頃、悟が歸りました。叶也から電話があつたと傳へました。それは明二十三日伺ふべく約束したけれど、差支へが出來て行かれぬとの事でした。一同は待つてゐた樂しみの予定が外れたので失望しましたが、裕子が來て呉れたのでマアマアといふ氣持でした。

其後千秋も歸宅致し色々交歡致し、十一時過ぎて就寢する。翌二十三日は天氣晴朗でした。悟は出勤、千秋は友人と約束があるとして九時頃出かけました。老婆と裕子は映畫を參觀するなど話しておりました。自分もお寺へ參詣するべく九時すぎに出かけました。

お寺に到着すれば、既に百人以上の參詣者

が居並んでゐられました。間もなく御讀經が終り、お説教が始まりました。説教者はお若い方で遙々讀岐から御入來の由承りました。

御法題は本願について尤も詳しくかんでふくめるやうに御説明下されました。其大意は左のやうに拜聴致しました。兎角信仰者の間には阿彌陀如來の御本願を獲得すれど、淨土參りが出來る、又自分が稱名お念佛してお助けに預りたいと念願しておらるゝ方が多いやうに思われます。それでは未だ御聽問が浅いと申しませうか。未だ御聽問が足らぬからだと申しませうか、阿彌陀如來の御本願におかせられては其様な生やさしいものでは御座いませぬ。阿彌陀如來におかせられては、五劫永劫の間御思惟遊されての結果一切衆生にはものを覺えて淨土參りをせよ、又善行をつんでお助けに預かれ、と申しても、到抵出來ぬ事であれば、一切衆生が自分の願行を積んで救わるゝのでなく、阿彌陀如來の方より救つていただくのです。罪は如何ほど深く共、障りは如何程多大であらう共、過去の事には執着せず、心神全く赤裸體となり、阿彌陀如來の御本願を信じて、稱名念佛してたゆまざれば

當方より助けたい救われたいと念願して助るのではなしに、阿彌陀如來におかせられては、一切衆生の聲をきこしめされ、一人残らず必ず救へとらずばおかぬといふ有難いお説教でありました。参詣者の中にはハンケチを顔にあてゝ聴聞しておらるゝ方も見受けまして、二席のお説教が終りましたけど起つ人は稀でした。殆どがお辨當を持参しておられ近親者相集りてお食事を攝りはじめらる。

寺院の世話方では大きな湯沸しにお茶をつくられ茶碗數十個そへて出されました。皆さんは睦しく笑話しながら攝食しておらるゝ情景は斯寺院でなくては見られぬと思へました。午後二時から重ねてお説教がありました。午前中の御法題に引續き二席聴聞いたしました。

家に歸つたのは五時近くでありましたが、室内は何となく賑々しく感ぜられた。靴を脱いで上れば、叶也一家が来ておりました。昨日まで待ちに待つた叶也が来られぬときい何となく物足りないやうな感じでありましたが、思いがけなく来て呉れたので本當に嬉しかった。話をきけば一昨日頃叶也には多少熱

氣味であつたので入來を中止すべく申しよこせしも、當日になりて熱も去つたので急に出て來たとの事でありました。丁度老婆と裕子が映畫へ行かうと支度してゐた折なので、都合であつたといふ事でした。潔も目立つて發育しました。慈子も遊び相手が出來たので騙けまわつて喜んで遊んでおります。自分も孫共と一緒になつて一時間ほど遊び、仕舞に乘馬代用にされましたが、年齢を忘れて幼稚な氣持であることが無性に嬉しかった。昨日

の今日であれば叶也には多少無理な點がなかつたかと後刻考へないでもなかつたが、親に會いたい姉に會いたいと思ふ一心から急に入來したかと思へば、持つべきものは子なりけりですね。お互に思いつ思われつ楽しく餘世を送るのも、第一にお佛の御支配の有難さ、第二に健康の有難さ、を感ずる刹那、胸に湧きいずるは稱名念佛であります。

(筆者は本誌愛讀者)

一六月NHK宗教番組一

2日(月)	愛と憎しみ	野上彌生子
3日(火)		
4日(水)		
5日(木)	東洋の礎	眞野正順
6日(金)		
7日(土)		
9日(月)	宗教心理と腦細胞	醫博 林 タカシ
10日(火)	ガンジー翁の想出	印度教師 マニカム
11日(水)		通譯 吉村三郎
16日(月)(大阪)	素人の信仰	岩田宗太郎
17日(火)	(大阪) 禪と生活	天龍寺管長
18日(水)		關 牧 翁
19日(木)		
23日(月)	宗教と文學	長 興 善 郎
26日(木)	法華經の行者	
27日(金)		文博 山川 智 應
28日(土)		



創作

吉

水

(一)

東山未知夫

夏の夜は明け易い。遙か瀬戸内から北へ北へと朝もやが擴がつてくる。そして見る見るうちにあたりを一面の白いもやの海と化してしまふ。太陽はもう既に昇つてゐるのだが、すつかりもやにつままれて、日中の月の如くぼんやりと浮かんでゐる。

遠くの方で雨戸を繰る音が朝の静けさを破る。間ののびたような牛の啼き聲が、雨戸の音に交つて聞こえて来る。此處^{ちこ}枳^し社の部落の一日の営みが、始まろうとしているのである。

時國の館でも、すでに今日の営みが始められていた。既では、馬^{うま}糞^{ふん}をやる郎從達の聲や、それが待ちきれないで、馬が前足で掻くこつこつという蹄の音が聞こえてくる。厨のあたりからは、ゆつくりと炊煙が昇つてゐる。ふと一匹の蟬が、時刻を間違へたのか、じゅと二聲ばかり鳴き始めて、はたとやめて了つた。いかにも平和な朝の一ときである。

しかし、世の中は平和ではなかつた。京では、藤原氏の最盛期は

もう過ぎていた。望月は既にかげはじめてゐる。京の火災の噂はもう人々の耳に馴れていた。宮中さえも屢々火を出していたのである。平安朝は藤原氏とともに過ぎ行き、終末に近づこうとしてゐる。人心もなにか終末的な空白を鋭くも感じ取つていた。その空白が、火災という形となつて京の街々に已れをあらわしてゐたのである。都の人々の空虚な心の隅に、時々焼え上るのが油斷の火の手である。しかし、火災は人々の心の油斷からのみではなかつた。争亂による放火も、その放火の延焼も又随分多きに及んでゐる。特に山門と寺門との僧徒の抗争によつて、有名な寺院が烏有に歸した。しかもこの僧徒の集團は、政治性をもつた暴力團體の性格を多分に持つてゐた。従つてこれら僧徒の抗争は、宮中でも、又一般人民でも、最も厄介なものであつた。かくて、藤原氏一門の公卿によつてになわれた華やかな平安朝文化は、このような僧徒の出現によつて、その凋落を早められ、既に次期になひ手である武士の出現を予示し始め

ていた。

地方も亦、人々の心には精神的、物質的の空白は蔽うべくもなかつた。藤原氏一門の平安朝文化の華は、云わば地方民の犠牲に於いて咲いたのである。藤原氏の榮華は、その盛大を誇れば誇るだけ、その莊園はもとより、一般の地方は窮乏に苦しんだのである。従つて、地方には當然盜賊の集團が横行したのである。

時國は、寢室を出て、靜かに朝もやにつゝまれた部落を見下してゐる。昨日と變らない平和な景色である。彼は、自然の平和なすがたに、しばしひたりながら、平和であろうとして平和であることの出来ない人間の生活について考え込んで了つた。時國は、この美作の國、久米の莊の押領使として此所に住みついでゐるのである。それは盜賊に對する良民守護の役目なのである。彼れは、最近になつて、屢々盜賊の出現を聞いている。瀬戸内の海賊の跳梁もひどくなつたようだ。ことに伯耆や彼れのいる美作では、盜賊が徒黨を組んで、人家を襲撃し、財物や、あまつさへ婦女子等をも奪い去つてゐた。

「困つたことだ……。」

時國は、誰れにともなくひとりごちた。秀麗な眉の間には、瞬間的却の神經がふるえた。盜賊が横行するのも、それ相當の社會的な原因があつた。京の公卿の生活を支えるためには、地方民はそれとく

物質的な犠牲を拂わねばならない。そして、このような物質的犠牲の集積が、地方に於ける物質的貧困という結果をもたらしている。この結果から發酵したものが盜賊であろう。盜賊たちに云わせれば彼等の出現にはこのように自然必然的な理由もあるだろう。しかしそれでよいのか。地方が貧しいから盜賊が出現する。それでよいのか。良民は一體どうするのか。物質的な自然必然性の上に、盜賊の存在を肯定することは、理論としては、一應正しいかも知れない。人間存在が、物質によつて全面的に構成されているものとすれば……しかし、現實の事實として、同じ物質的環境のもとにあつて、一方の人々は盜賊になり、他方の人々は盜賊にはならないで、いわゆる良民であるということとは、一體どういうことであらうか。これは、物質的環境が人間存在を全面的に規定して「いない」ことを示すものでなければならぬ。盜賊になるか、良民になるかの選擇の自由は、地方民の各々の「心」のうちになければならぬ。

「私は、人々の心を重んじなければならぬ。盜賊のためにも、平民のためにも。」

又、時國が、ぼつりと獨語した。

「私は、盜賊を討つためではなく、盜賊の心の中にある賊を破るために、私の職を興えられているのだ。」

アメリカ二世の信仰

(2)



白井憲成

少くともこのやうな老人は、親子の考へ方の根柢には、從來の東洋的家庭道德としての孝行と云ふ倫理觀念を持つてゐる筈である。親が子に注いだ愛情に對して、親は何かなし子供からの報いを期待している。嘗ての觀念からすれば、これは當然返済すべきものとして、強制されていたのであり、子供は親の愛情に對する代償として、無意識の中に孝といふ行爲を持つていたのである。

したがつてこの老人の淋しさと云ふのも、この老人が子供から當然受ける可き、自分の愛情の代償への期待が外れた事を意味しているのである。更に言葉をかへれば、この老人が息子は自分に所謂孝行をつくして呉れるものと思ひ込んでいたのである。子供は親に孝をつくす可きものだといふこの親の期待が、この息子に依つて充分報いられたかつたといふ事にもなるのである。自分が苦しい間子供に注いだ愛情が何等報いられたかつたという所にこの老人の淋しさの根本があるともいひ得よう。したがつて純粹に宗教的な法要と云ふが如きものも、この子供が親に對して當然つとめる可き儀式或は儀禮として、この老人は孝行の一つ要素と考へてゐるのである。所がアメリカに育つた子供は、親につくす

可きものを、このやうな東洋的な倫理觀念としてはいだいていないのである。即ち親の愛情に對する代償として、強制される孝行と云ふ觀念を持つていないのである。この様な倫理觀念は、戦後の日本に於ては、大いに修正されてはいる。所がこの老人をも含んで、廣く一世邦人は、この様な觀念をいだき續けてゐるのである。だから

『せめて親の法要ぐらいに……』とこれが老人の息子に對する最後の願ひとなるのである。そして又死んだ親の法要を立派に営むことが、その息子の親孝行の度合をはかるバロメーターの如く考へられがちなのである。

たとへば戦前の我々の周囲に見られたやうに、立派な法要をいとなむことが、自分の親孝行を世間に示す唯一の好期でもあり、又それが同時に自分の立身出世の社會的表示にもなり得たのである。こんな觀念が、アメリカに育つた息子たちにわからう筈はない。『それこそ、日本的なエゴイズムですよ』『つくす可きは、親の生きている中につくす可きではないでせうか』と、息子たちは、こゝろから俊嚴に親を批判し始めるのである。これらの言葉は、或る意味での日本批判をも意味してゐると言ひ得るだらう。

老人は、この息子の批判にあまり關心を持ちそうではない。老人は相變らず淋しい世界の中に自分の世界を持ちつけやうとする。

この間の消息は、むしろ息子の言葉に耳を傾ける事に依つて更に充分な理解が得られるであらう。

これを機會に、何回もその家庭を訪ねた私は、その息子たちの言葉の中から、彼等の言いつ分を聞くことが出来た。

息子夫婦は、キリスト教徒である。したがつて、彼等が先ず私に向つてはく言葉は、佛教批判でもある譯である。

『宗教は個人のものですよ、家族のものでもなく、まして祖先崇拜でもないのですよ所が現在の實情はどうですか……』と云ふ息子の言葉は、彼の親の信仰態度をうたがふと同時に、佛教自體の在り方への批判をも含ませているのである。即ち日本の家族主義と結びついて、やつと存續している佛教は、現在に祖先崇拜と云ふ儀禮以外には生きていない。祖先の供養は無視する譯ではない。しかし三年五年に一回位い寺に參つて法要をつとめただけで、自分は佛教徒だなどと云ふその氣持が私には全然わからないと云ふ。

『私の親がつとめる法要も、要するに自己慰

安じやありませんか、死んでしまつた母の法要をどんなに立派につとめた所で、それが母に報いたと思つてゐるのは、父だけです。

父がそう思つて、自分で満足してゐるだけですよ。つくす可き事は、もつと／＼生きてゐる中になしておく可きではないでせうか……』と、結局、父がつとめる母の法要を、父の自己満足においてゐるのである。

『佛教は、結局過去へばかり向つて、何んら現實に足を下してゐないではないですか。そんな死んでしまつた人の成佛を願ふよりも、現在生きてゐる自分が、どうしたら往生し成佛出来るかという道を早くつかむと云ふ事ではないでせうか。』

『親籍・知人をよんで、立派な法要をする事それは或意味では宗教的な意味も認められな事はない。しかしそれは決して、自分の信仰の問題をとくかぎにはなりませんよ。それは一種の現實逃避であり、又コカコーラを飲んだ後味のやうなもので、一種の清涼濟に過ぎませんよ。法要をつとめれば、それで死んだ人にも、つとめがすんだのであり、それで親籍知人と云ふ社會に對しても、つとめがすんだと考へるのでせう』『おつとめとは、何か自分が負わされてゐる負擔のおかえしのつ

とめではないですか』と次々と質して來るのである。

だから

『わしが死んだら、息子がどうして呉れるだらう。わしがつとめる法要だつて參詣しないのだから、わしが死んで法要なぞとてもつとめて呉れそうもない……』などと父はなげいていますが、そういふ風に考へてゐる父の信仰と云ふものが、私には全然わからないのです。往生し成佛する道は、自分で見出す可きではないですか。息子がつとめて呉れる法要で成佛するなどと考へる、それがわからないのですよ……』

『何故佛教は死んだ人の法要だけに、生きやうとするのですか』

熱心なキリスト教徒でもあり、相等な教養もあるこの青年は、最後には『佛教は要するに隱居の宗教ですよ』と斷定してしまつたのである。

この青年は、佛教教理の哲學的な深淵さは認めてゐる。しかしその哲學的な理論も、宗教的な實踐を離れた時には、生命は無いと云ふのである。したがつて、彼の言葉は、具體的な佛教徒の實踐と云ふ問題を指適してゐるとも言い得やう。だから、彼の言葉は、『何

かなし、冷たい、よそ／＼しい……」態度として父にはうけとられるのである。

更にこの青年の言葉に耳を傾けやう。彼はルース・ベネディクトの『菊と刀』を讀んでいるらしい。自分の親爺の批判を通して感ぜられる言葉は、これを暗示する。

『たとへば、よく恩を思えと父は言います。御恩がえしだとか、恩をいくつも数えるじやありませんか、天地の恩だとか、父母の恩だとか……』

『それはたしかです。自分たちが生きて居れるのも、自分一人の力でない事はわかつています。あらゆる人の力で生きてゐる事は事實です。しかしこの爲に、日本の人たちはかえつて個人がほんとうに個人として生きられなくなつてゐるのではないでせうか。父母師長の恩だとか、社會の恩だとか、何か自分以外の大きな力にしばられてゐる様な感じがするのですよ。だから法要だつて、御恩がえしの一形態ぢやありませんか。』

『佛教は、個人が置かれてゐる、その背後に父母、師長、社會、天地自然、などと云ふ、大きな世界がある事に、氣づかせた事は立派です。こう云ふ世界の上に、始めて一人一人が生きて居れる事を眼ざめさせたのですか

ら。しかしそのために逆に、ほんとうに個人に眼ざめる事を輕視してゐる様な所がありませんか。佛教は、現在は、その最初の意圖とは、全く逆な所へ來てしまつてゐるのではないですか。ほんとうに個人個人、一人一人を覺醒させる爲に、その背後の世界をといたのに、その結果、その背後だけに眼を向けさせほんとうに個人を覺醒させる事が出來なくなつたのではないですか。だから親爺のように法要だけつとめて満足し切つてゐるのです。その満足だつて、死んだ人に對するつとめをはたしたと云ふ満足に過ぎないのであつて、ほんとうに自分が救われた喜びではないのです。それが證據に、自分が死んでから、つとめて呉れるかどうかかわからない法要を心配してゐるではありませんか。……』

『だから親爺は、佛教徒だと云つて、私がキリスト教徒となつた事を後悔して居ますが、私がたとへ佛教徒となつた所で、同じ事です。何故かと云へば親爺の宗教は、あれは一種の祖先崇拜の儀禮でしかないですからね』
話が此處まで來れば、息子の言葉は、單なる親爺批判ではなくなつて來る。その息子の親に對する冷たさは、佛教自體に對する懷疑の眼の冷たさでもある。

しかし、この青年は、むしろ彼の態度の中で、淋しい親に對する限りない愛情を示してゐるのである。要するに眞に信仰を持ち得ない親に對する憐れみかも知れない。

以上の如きその青年の話に對して、佛教者である私は、私なりの答へを與えて來た。それはそれとして私は別の機に稿を改めるつもりである。これは宗教の本質をつく問題でもあるからである。

しかし、この青年の言葉は、傾聴す可き言葉である。

一般に、アメリカに於ける二世の青年たちは、この様な言葉はあまりはかない。彼等はこんな言葉をはく必要など感じてはいないのであらう。戦後の日本と同じやうに、こんな言葉をはく事もなく、ただだまつてどん／＼遠のいて行つてしまふ。残された形骸の中には、たゞ所謂陰居の宗教が残るだけである。

思想の變遷はこれに更に拍車をかけて行く。この老人の淋しさにほんとうに答えるものは、死者の法要だけで十分であるとは云ひ得ない。それは佛教者の各々に依つて見出されそして、その實踐の中に始めて、その老人の淋しさも、眞の法悦の喜びにおきかえられる譯である。

こゝでは一應、私の實際に接した、ありのままの記述のみにとゞめる事にしよう。

阿彌陀經の話 (1)

藤井實應

(一) 淨土三部經——法然上人が淨土をお開きになるに當つて、その宗の依りどころとする經典を決定するのに「正しく往生淨土を明す教」と「傍に往生淨土を明す教」とを別ち

「正しく往生淨土を明す教」といふは、いわゆる三經一論これなり。

三經といふは、一には『無量壽經』、二には『觀無量壽經』、三には『阿彌陀經』なり、一論といふは天親の『往生論』これなり、この三經を結して淨土の三部經と號す『選擇本願念佛集』

といつて、淨土の三部經を正依の經典と決定されてから、日本淨土教の不動の傳統となつたのであります。『阿彌陀經』は『無量壽經』や『觀無量壽經』に比して一番短い經ですから略して『小經』と呼んでいます。それに對して『無量壽經』を『大經』と呼び、『觀無量壽經』を『觀經』と略稱しています。この三部經をまとめて組織的に述べられたのが『往生論』で、佛滅後九百年、印度カシミルに出世せられた天親菩薩の著わされたものであります。

(15) (二) 阿彌陀經の寄興——『阿彌陀經』はわが國に早くから傳わつてあらゆる時代を通して偉大な感化を國民に及ぼしました。それは何

故かという、その説かれている法が眞實の勝れた法であり、誰でも救われる道が説かれてあるからであります。それはまた、佛教がわが國に渡來した當初から阿彌陀佛の尊像が傳わり、聖德太子は天壽國往生を願われたが、天壽國とは、無量壽國即ち阿彌陀佛の極樂淨土のことであるといわれ、推古朝には慈覺(六五〇年頃)が二度まで宮中で『無量壽經』を講義したことがあり、奈良朝時代すでに阿彌陀佛の信仰者が現われるなど、淨土教がわが國に最も有縁の教法であつたからであります。そのほか此經がわが國一般に弘まり讀誦されるに至つたのは、その經文が長からず短からず、讀誦するに最も手頃であることや、その文が流麗で、讀誦していると春の光に照さるゝが如く、如來の淨國に遊ばしめられるようにならされることや、阿彌陀佛の信仰が盛なるに隨つて一層普及したことなどが考えられます。

かの勅修御傳(法然上人行狀畫圖)の第四卷には法然上人のお言葉として、左の如く記されています。

「凡そ此『阿彌陀經』は我朝に都鄙處々におほく流布せり。『法華經』と『最勝王經』とは、諸宗の學德、兼學すべきよし、桓武天

皇の御時、宣旨を下されて定め置かれしかば、演説者として『法華』を解説する師は多くなりたりけれども、暗誦する人なかりけれども、暗誦する人なかりければ『法華』を暗誦すべきよし、かさねて宣旨を下されけるのち、持經者多くいできたれり。『法華』は加様に宣旨によりてこそ、流布せられたれ、『阿彌陀經』は其沙汰なけれども、自然に流布して處々の道場に、みな例時とて、毎日かならず『阿彌陀經』を讀み、一切の諸僧『阿彌陀經』をよまずといふことなし、これひとえに、淨土教の有縁のいたすところなり。』と。法然上人の仰せの如く、まさに「淨土有縁のいたすところ」で南無阿彌陀佛の宗教に最後の歸趣を見出す者は、此經に對する興味と理解を深く持たざるを得ないのであります。

(三)阿彌陀經の翻譯——漢譯は、現在用いられている姚秦の鳩摩羅什譯の『佛說阿彌陀經』一卷の外に、宋の求那跋陀羅譯の『佛說小無量壽經』一卷(これは現在失はれてありません)と、唐玄奘譯『稱讚淨土佛攝授經』とがあります。

そのほかマクスミューラー博士の梵本からの英譯は『東方聖書』第十八卷に攝められています。南條文雄博士の梵本からの和譯は『佛說阿彌陀經梵文和譯支那二譯對照』として『大經』和譯と共に出版されました。荻原雲來博士にも梵本よりの和譯があり、『淨土宗全書』別第一卷に攝せられています。

(四)無間自說教——この阿彌陀經は、無間自說教といわれています、

それは釋尊自ら舍利佛に呼びかけられ、自ら欲するまゝにお説きになつた經という意であります。『大經』は王舍城耆闍崛山に於て、阿難が釋尊におたづね申したことが因となつて説法がはじまります。

『觀經』は王舍城の牢屋に苦惱する韋提華夫人の請によりお説きになつたものであります。しかるに『阿彌陀經』は釋尊の方から「舍利佛よ」と呼びかけられてはお説きになつたのであります。他の經は尋ねられて答えられたお經であります。此經は佛の自らの意に隨つてその教で、即ち佛隨自意の法門といわれ、釋尊が述べたくてならなかつたお心をそのままに説かれた法門なのであります。それは甚深微妙の法を説くというよりも、むしろ釋尊の此世に出でました本懷を示されたものというべきであります。『大經』は阿彌陀佛の本願を説かれたもので出世の本懷たる万人の救わるゝ眞實の法をお述べになつたものであり、『觀經』は韋提華夫人という、われらと同じように苦惱にあえぐ愚痴の者、即ち救われねばならぬ機根(人のこと)を明かにして念佛を説かれた經であります。『大經』の法と、『觀經』の機とを併せ説いて、法と機とが一つになる念佛行の信を説かれたのが、この『阿彌陀經』であります。三經の結經といわれまた一代佛教の結經といわれる所以であります。

(五)此經を頂く態度——此經は釋尊が「舍利佛よ」と呼びかけられてお説きになつた經であります。舍利佛は釋尊門下、智慧第一といわれた大弟子であります。釋尊に代つて諸弟子を教導した人です。その智慧第一といわれた舍利佛が、一度も質問すること

なく、たゞ黙々としてその教説に聞き入つてゐるところに、この經の主要な特色が見出せるのであります。自ら問を出さぬのはその智慧を働かさぬことであります。凡愚にたちかえつて、自力、はからいをふりすてたすがたであります。阿彌陀佛の本願念佛のおこころも、またかように自力の智慧を捨てた謙虚な無の態度によつてのみよく聞思することができ、信行することができます。舍利佛のこのすがたは、眞實の法を聞く、眞實の機のお手本を示されているといふべきであります。

(六)經題——『佛說阿彌陀經』

この經題を和譯すれば「佛、阿彌陀を説き給ふ經」となります。佛は覺者、さとれる者、眞人、ということ、この場合には釋尊をいうのであります。阿彌陀は、無量壽と譯します、無量壽は不生不滅の生命、眞實の生命であります。この無量壽佛は釋尊をして佛教たらしめたもの、釋尊のおさとの根元、釋尊の眞生命であります。同時にそれは一切衆生の、即ちわれわれすべての人の眞生命となるべきものであつて、人と法と一つになられた根本のみほとけであります。くわしくは本文に説かれていますからそれにゆずります。經は梵語の修多羅(*sūtra*)の譯で、たていと、線のことであります、曇鸞大師が「經は常なり」と申された如く、經は常恒なる眞理を説いたものという意であります。

(七)譯者——「姚秦三藏法師鳩摩羅什詔を奉じて譯す」

姚秦は五胡十六國の中の一で、三世三十四年間つゞいた國であります。佛教の基礎が確立し、教學の轉機に臨んだ時代で、カシ米尔西域諸國から、高僧譯經者が續々と中國にやつて來た時代であります。此經は姚秦の二世姚興王の勅命を受けて、弘始四年龜茲國の鳩摩羅什(*Kaśmirajīva*)三藏法師が翻譯したものであります。三藏法師というのは、經、律、論の三藏に通じ、兼て梵語漢語をよくし經を譯し弘道をする人であります。羅什は中國翻譯家の中でも最も有名な一人で、中國の翻譯には舊譯と新譯とがありますが、その舊譯の方の中心人物であります。新譯の方の中心人物は玄奘三藏であります。舊譯は文學的、新譯は哲學的だといわれます。羅什は法師であつて妻があり、在家生活をしながら翻譯に従事しました。此經の外に梵網經、妙法蓮華經、維摩經、十誦律、大智度論、中論、十二門論、成實論等の有名な經論をはじめ三百有余卷の翻譯をせられました。弘治三年(四〇一)姚秦の首都長安に來り、爾後十二年間、弘始十五年七十歳入滅に至るまで、翻譯講説に従い、幾多の英才を薫育して佛教に弘道努力しました。天下の秀才はその譯經場に集り秦王は百官を率いて日々參列し、みづから筆受の勞を取つたと傳えられます。(つゞく)

會員の方々からの投稿をお待ちしております。信仰實話、體驗、時評、和歌俳句等、どし／＼お送り下さい。淨土輪讀會、淨土の集ひなどの記事も結構です(送先、東京都港區芝公園五の十法然上人續仰會編輯部)

地獄・極樂はどこにあるか

藤 田 寛 海

地獄や極樂とはどんな處であらうか。

それはまた、何所にあるのだらうか。

といふ事は眞面目に考へるさへ、科學の進んだ今日では笑止の極みだと或ひは言ふかも知れない。

然し、地獄や極樂の話は、いろいろと昔から傳へ残されてゐる。古いものでは、一二〇〇年程の昔、文武天皇の慶雲二年に膳臣廣國が、地獄で悶え苦しむ父親に遭つたといふし結城上野入道も地獄に墮ちたと傳へられてゐる。

また、丹後の國の或る上人は、極樂往生を願つた餘り、毎年元旦の朝早く召使ひのものに門を叩かせ「極樂世界から阿彌陀様のお使ひに参りました」と叫ばせてゐた、到々望み通りに菩薩の來迎をえて往生をとげることが

出來たと云はれる。

或ひは、西方の極樂を求めて西へ西へと旅をつゞけた或る男が、結局旅立ち初めた故郷に戻つて來てしまつたと云つた話もあるが、

これは、地球が圓いといふことを人々が知つた、比較的新しい時代の作り話かもしれない。

その他、極樂界の軍勢と地獄の鬼どもが戦戈を交へると云つた筋の「佛鬼軍」といふ小説も三百年程前に作られてゐるやうに、地獄や極樂の話が数多いのをみても、此の二つの世界は常に人々の心をひく問題であつたと云へやう。

もともと、地獄とか極樂は佛説に基づいたもので、經典によると、地獄が鬼に苛責される苦虐の國であるのに對して、極樂は佛の無量廣大の慈悲の光に照される樂園であつて、

人間が死後そのいづれに到るかは、「此の世」での生き方や心のもち方によると説かれてゐる。彼の有名な紫式部でさへ、源氏物語といふ小説を著して多くの人を偽り迷はせた罪のために地獄に墮ちて無間の苦しみをうけたと云はれる。

孰れにしても、地獄とか極樂と云つた「あの世」の相を知り、延いては「此の世」での生き方を人々は佛教から學んだのであるが、それでは、佛教が傳へられる以前、「死」や「死後の世界」(あの世)をどのやうに觀じてゐたであらうか。

(1)

「神話の時代」と云はれる昔、死後の世界は「根の國」または「底の國」とも呼ばれて地の底深く在る汚れた世界と信じられてゐた。

「古事記」(一二四〇年以前のもの)をみると、イザナミノカミ(女性神)が崩せられたとき、イザナギノカミ(男性神)は女神を尋ねて「根の國」へ赴かれたが、餘りにも汚れて醜く變りはてたその姿に驚かれて、一散に「此の世」へ逃げ歸られたと傳へてゐる。

このやうに、「根の國」即ち死後の世界が汚れに満ちてゐるのに對して、一方「此の世」

(生の世界)は清らかな世界と考へられてゐた。

古い時代の天皇のお言葉や書物の中には、人間が本來もつてゐる心をマコト或ひはマゴコロと呼んで、「清キ明キ正シキ直キ」ものと述べてゐるが、此の清く正しいマコトの人間の住む故に「此の世」の清らかさは保たれる。竟り、「此の世」と「あの世」、清浄と汚濁の二つの世界は互に隣り合つて、その境をなしてゐるのが「死」といふ事實である。

普通「死」は一切の消滅と考へられてゐる。流れ去る川の水が再び戻つて來ないやうに、過去をとり戻すことが出來ない様に、「消え去る」ことばかりが「死」であるかの如く云はれる。

然し本來、「死」は「止」または「始」といふ二つの意味を併せもつたもので、「此の世」即ち「清浄」の終止と同時に、また「あの世」即ち「汚濁」の開始をも意味してゐる。

「此の世」に生きる清く正しいマコトの人間が、また現實の清浄を愛し「死」を忌み憚つたのも、其れが「汚濁」の開始であつたが爲めである。

然し、生きるもの總ては、この「死」を免れることは出來ない。

神話の世界での「死の國」への往來も、人間の現實としては爲しえないと悟つたとき、

「死」は如何ともしがたい恐しい事實と感じられる。古事記や萬葉集と云つた古典には、「死」に直面した如何に多くの人の驚きや恐れが語られてゐることであらうか。

此のやうに「死」が恐れられたのは、それが「汚濁」の始まりを意味したからであつた。若しも死後の世界が、また清浄界であるならば、「死」は避けられぬ事實としても「恐れ」とはならぬであらう。

そこで人々は、新しく傳へられた佛教から「輪廻」といふことを學んだ。竟り、死後もまた輪廻して、清らかな「此の世」に生れ變つてくると云ふことで、此れによつて「死」は汚濁の開始の意味ではなくなり、人々も「死」に直面する心のゆとりをもつことが出來た。

然し時代が降るに従つて、「此の世」の相は神話の時代や建國の當初よりも複雑になつてゆく。

生きるために、望みをとげようとして人々は相争ひ、總ては苦難に満ちた「憂き世」と觀ぜられ、「此の世」は次第に其の清浄さを失つて汚濁の世界、即ち穢土と思はれるやうになつてゆく。

なつてゆく。

従つて、死後も再び輪廻して汚れた「此の世」にまた生れてくることは堪えられない。

そこで、總てが肯定される、絶対に清く明るい世界を得ようとする願ひが生れるのも必至であり、その結果再び佛教によつて教へられたのが「極樂・淨土」であつた。

然も極樂とか淨土は地獄や穢土あつてのものであるから、極樂を知つたと云ふことは、また地獄を學んだとも云へる。

竟り、地獄または極樂は、佛教によつたものとは云へ、此れを攝取するまでに當時の人々の心は成長し、また此れらを必要ともしてゐたのであつた。

それは平安時代——今を距る一一〇〇年程の昔の事であつた。

(2)

それでは地獄とは何んであらうか。

經典によると、奈良迦(ナラカ)または泥黎(ニリヤ)と呼ばれて、惡人が苦報をうける處で、此處に墮ちたものは鬼の苛責に遭ふと云はれる。

然し、苛責によつて罪を贖ひ淨めたときは極樂へ救ひ攝られるのであるが、芥川龍之介の「蜘蛛の糸」といふ小説には、墮獄の人間

が私慾にうち克てず、佛の降し給ふた蜘蛛の糸、即ち極樂への道を踏みはずして再び地獄の苦患に墮ちこむ姿が描かれてゐる。

「地獄」の「地」とは「底」であり、「獄」とは「局」、竟り限られた場所といふ意味で、それは地下五百由旬——約二千里程にあると云ふ。然しこの距離は單に「遠い處」と云つた程で、正確な數を示したものと取る必要はない。

そして、此のやうな地獄の様相を畫いて、「此の世」での人間惡の戒めとしたものが「地獄繪」または「地獄變相圖」であるが、平安時代一流の才媛として名高い清少納言でさへ地獄繪におびえて逃げ出したと自身記してゐるやうに、苦難に悶える墮獄の人の姿や苛責ある鬼の有様は、確かに見る人を震ひあがらせ、「此の世」での惡行がどのやうな形で「果」として自身にふりかゝつて來るかを悟らせたに違ひない。

この「地獄」と切り離すことが出來ぬものは「鬼」であらう。

「鬼」とは「隱(オン)」の變化した言葉で、初めは「見えざるもの」といふ意味であつた。死者の靈を「人鬼」または「靈鬼」と云ひ、「鬼籍に入る」がまた「死」の意味に用ひら

れるのも此のためである。

然も、丑寅の方角を易では「鬼門」と云ふ處から、「牛」と「虎」とをかたどつた異形に畫くのであるが、後にはその形から「見なれぬもの」や「恐ろしいもの」總てが「鬼」と呼ばれるやうになつた。「鬼瓦」「鬼昆布」或ひは「鬼蓮」といふ名前も、または「鬼の留守の洗濯」といふ俗諺の「鬼」も此の意味をもつてゐる。

更に「鬼」は「執念」とか「執念深いもの」と云つた意味にも用ひられる。

それは、地獄に墮ちたものを一人残らず捕へたり、烈しく苛責することによつたので、子供たちの「鬼ごっこ」と云つた遊びは、相手を捕へ、また捕へるまでは容赦しない處から名付けられたのである。

また「債鬼」とか「貪鬼」と云つた言葉もある。

元日や昨日の鬼が體に來る

といふ川柳の「昨日の鬼」は「債鬼」のことであるが、その容赦しない無慈悲さ、金錢に對する強い執着から「鬼」といふ字が用ひられてゐる。そして、其の無慈悲な「債鬼」が昨日までの事は忘れたかのやうに年頭の挨拶に來たといふ、大晦日の一夜を境とする對照

の面白さが此の川柳の眼目でもある。或ひは「貧鬼」も、貧乏といふものが纏はりついて拂ひ落せない處から生れた言葉である。

そして、「地獄」と云へば「鬼」を連想する處から、右のやうな「鬼」の意味が、そのまゝ「地獄」といふ言葉の意味に轉じて用ひられるやうになつて終つた。例へば、鼠を逃さず捕へる道具を「地獄おとし」と云つたり、他人の話を漏らさず聞きとる「地獄耳」と云ふのも、皆こゝから生れた言葉である。

然もこのやうな「鬼」「地獄」と「執念」や「執着心」との結びつきから、後には「鬼」は「執念」を具體的に表したものと考へられるやうになつた。

もともと、「執念」とか「執着心」は「私慾」や「野心」と結ばれた場合が多く、ときには同じものと云つてよいであらう。或るものを得たいと欲する心は、また其れに執着することでもある。地獄に墮ちた人が「鬼」といふ「私慾」に責められることは、その「私慾」のために總てが征服され、またマコトが「私慾」に覆はれる相とも見られる。

そして、此のやうに「鬼」や「地獄」の苛責を考へると、其れはまた「此の世」の相とも通じるのであつて、「地獄」は唯に死後の世

界だけではなく、「此の世」もまた「地獄」であると云つた考へが生れてくる。

地獄の沙汰も金次第

と云つた俗諺が四百年程の昔、即ち徳川時代から用ひられるやうになつたが、金銭が門閥や家系よりも尊ばれ、「慾に手足のついたのが人間」と云はれたのも此の時代であつた。

竟り、「金次第」と云ふのも當時の「此の世」の相であつて、こゝに「地獄」と「此の世」とを同じとする考へが窺はれやう。

此のやうに眺めてくると、「地獄」は單に死後にばかり求められてはゐない。

其れは「私慾」が總てにうち克つ世界であり、我々のもつ「清き明き正しき直き心」、竟りはマコトが爲めに覆はれ、その光を失つたとき生れるのである。

(3)

其れでは次に極樂・淨土はどうであらうか。

經典には「一切ノ身心ノ憂苦ナク、無量清淨ノ喜樂アル」世界で、「此の世」を距る十萬億刹に在ると云ふが、此れも正確な數を示したと見なくてよいであらう。

前にも述べたやうに、「此の世」が苦難に満ちた「憂き世」と觀ぜられ、苦慮の「地獄」

と思はれるとき、清く明るい世界、即ち「極樂・淨土」に生きようとする願ひは昂められる。此の「極樂」に參入し、「淨土」に生きることをまた「往生」とも云つてゐる。

平安時代の末、度重なる戰亂に人々の「生」が脅かされ續けたとき作られた次の和讃にも極樂・淨土への強い憧れを見出すことが出来るであらう。

草ノ庵ノ靜ニテ 八功德池ニ心澄ミ ヌ
フベノ嵐音ナクテ 七重行樹ニワタルナ
リ 臨命終ノトキイタリ 正念タガハデ
西ニ向キ 頭ヲカシゲ手ヲアハセ イヨ
イヨ淨土ヲ欣求セム

聞ケバ西方界ノソラ 伎樂舞詠ホノカナ
リ 見レバ緑ノ山ノハニ 光雲ハルカニ
輝ケリ

然し、極樂・淨土への此のやうな強い憧れは「此の世」に満ちあふれてゐる限りない憂苦に堪えかねた餘り、早く逃れて極樂の喜樂に身を托したいといふ、單なる逃避や回避ではなかつた。

其れは純淨を尊び、明るく正しいものを求めて止まぬ心、即ち「清き明き正しき直き」マコトの發現であり、清淨を求める相なのである。

然も「地獄」の場合と同様に、極樂もまた「此の世」のうちに見出し、現世に淨土をうち建てようと願はれる。藤原通長が法成寺の無量壽院を建立し、或ひはその子の賴通が平等院の阿彌陀堂を造つて「極樂・淨土ノヨノ世ニ現レケルヨ」と感嘆されたのも、等しく此の心の現れに他ならない。

或ひは「遠クテ近キモノ極樂」といふ言葉も枕草子に記されてゐる。十萬億刹と云つた遠い淨土も、また身近に求められるといふ此の言葉の中には、極樂も死後のみの世界ではないといふ、作者清少納言の確信を見ることが出来る。

極樂は遙けきほどと聞きしかどつとめて至るところなりけり
の歌のやうに、極樂は「つとめ」ることによつて容易に「至るところ」なのである。

それでは此の「つとめ」、即ち極樂往生の道は何處に求められるであらうか。

確かに寺を造り佛を造ることも其の一つの方法には違ひない。

然しそれは、道長とか賴通と云つた權勢や富をもつた人々によつてのみ爲しうることである。

財力も乏しく、また地位も低い多くの人々

は、一體どのやうにして極樂への道を見出し
たらよいであらうか。

淨土は限られた人によつてのみ、其の門が
開かれるのであらうか。

此處に阿彌陀佛の慈悲による救ひを教へ、
富める者も貧しき人も、自分や地位をも問は
ず、あらゆる人に極樂への道を示されたのが
法然上人である。それは凡そ一一七五年前の
ことであり、上人によつて創始された宗門を
淨土宗と云う。

上人は先ず、淨土への道は「極樂へ往生セ
ント願フ」ことによつて拓かれると説いて居
られる。

「タゞ心ノ善惡ヲモカヘリミズ、罪ノ輕キ
重キヲモ沙汰セズ、心ニ往生セン」と念ずる
ことが肝要であつて、「ソノ決定心ニヨリテ即
チ往生ノ業ハ定マル」のである。

然も此れは、單に往生したいと云つた淡い
望みや、淨土を夢想することではなくて、「往
生することが出来る」と「深ク信ズル心」を
確立させることである。

竟り、「淨土」を信じ、「佛の慈悲」を信頼す
ることであり、また自分自身を信ずること
でもある。

そして、此の確立された「深ク信ズル心」

が行ひとなつて示されたのが「念佛」の行で
ある。

従つて、「念佛」とはたゞ「南無阿彌陀佛」
と口先に唱へることだけを云ふのではない。
「念」とは心を凝すことであり、「心に助け給
へ」と佛に隨順し、佛を信ずることこそ、「念
佛」の中心であつて、「心ヲ清クシテ申スヲ第
一ノ行トシ候」と上人は申して居られる。

觀無量壽經には「一々ノ光明遍ネク十方ノ
世界ヲ照シテ、念佛ノ衆生ヲ攝取シテ捨テ給
ハズ」と説かれてゐる。

遍く照す太陽は、總てを清め、また育てる
慈悲の光である。然し此れを希み願ふものゝ
みが、その願ひの如く花を咲かせ、實を結び
うるであらう。與へんとするもの、そして求
めるもの、そこに花や實がもたらされる。

佛の慈悲は隅なく人々の上にそゞがれる。

心なきものはたゞ唯これを見過し、心の穢と
して己れを昂めるには至らない。

たゞ「念佛ノ衆生」のみ佛の願ひの如く、
そして己れの求めるまゝに、無量の慈悲に包
まれて淨土の喜樂に身を浸すことが出来るの
である。御法語にはまた次のやうに申されて
ゐる。

今極樂ヲ求メン人ハ、本願ノ念佛ヲ行ジ

テ、攝取ノ光ニ照サレントオボシメシ、
コレニツケテモ念佛大切ニ候

たゞ阿彌陀佛への絶對の信頼、即ち感謝の
マコトを「此の世」に充滿させ、此の心に徹
して佛の御名を唱へるとき、極樂を「此の世」
の中に見出すことが出来るのである。

人間はたゞ獨りで生きてゆけぬ弱點をもつ
てゐる。「人」といふ文字が左右互に支へあつ
て出来てゐるやうに、或るものは自分の肉體
を、また或るものは己れをとりまく物質をた
よりに生きてゆく。

然し肉體も物質も、永遠の「生」を保つこ
とは出来ない。そこに「此の世」はまた「無
常」と觀ぜられる。

若しも我々が何ものかを頼りながら、尙ほ
永遠なそして清らかな「生」を求めようとす
るならば、恒常なものゝ發見こそ肝要と云は
ねばならない。

不滅なるものゝ即ち佛の慈悲である。

信仰の尊さと、佛の慈悲に身をゆだね、「念
佛」による生活によつてこそ、「此の世」に極
樂をうち建て、淨土に生きることが出来るの
である。

佛を信じ、また己れを信じえぬとき、そこ
に地獄を見出すであらう。

地獄や極樂はどこに在るか。

それを現し示す鏡は、人各々の心のうちに
秘むのである。

(山形大學教授、國文學專攻)

稱念上人

——東山遊記——

大橋俊雄

去る年の卯月も初め、東山の櫻は今をさかりと咲きにほふ頃、花のむしろに集う老若男女の姿もちらほらと見えた、雨あがりのすつきりと晴れた一日である。緑に映ゆる街のおちつきはそれが古都であるだけ昔の佛を漂はせ魅するが如く、一層親はしく思はせ、花やかな昔の營みへの追慕の情を涌きたゝせてくれる。知恩院の三門をくよりぬけて、それが華頂のいたゞきに近づくあたり、幾つかの石段をしつかりと踏みしめながら、祖廟に詣で今を去る八百年の當時を回想しつゝ勢至堂に面して建てられた一心院を訪ねた。東山なる一心院は捨世派の鼻祖稱念上人を開山と仰ぐ淨刹である。庫裏に請じ入れられ、上人の御遺墨にかこまれて茶を喫しつゝ眼下に京の町を一望のもとに見下した。そこは賀茂川の水が一條に流れる京の縮圖でもあるようだ。私が上人を知つてからもう何年にならうか。この名を祖父に聞いたのだから。

一

永正十年（一五一三）陽春三月のことである。武藏國の品川には孜々として産聲があがつた。藤田左衛門尉道昭の館に男子が生れた

のである。その子は幼少の頃から英才敏悟であつたと云う。非常にすぐれた頭腦の持ち主で何かにつけて人をおどろかしたらしい。九歳（大永元年）の時には父母の許しをうけて増上寺にその時の住職であつた七世親譽上人を拜して弟子となり、髪をそつて名を吟應と改めた。稱念と云うのはたゞ専ら稱名念佛三昧をことゝしおこたることなく、無間に修したまう御心から後に自からつけられた名前で行成つてからは一宗の秘決と圓頓戒をうけられて三蓮社縁譽と號された。親譽の許にあつたのは五年程で、師がなくなつてから後は、飯沼の弘經寺に鎮譽上人を訪ねて岩槻の淨安寺に住するまで實に十六ヶ年の長い間その膝下に侍り、念佛三昧とその弘通に日を送つた。淨安寺に住してから近隣の各地から道俗が集まつて、いろ／＼と法を聞きにくる者がふえて來た。

夫出離生死を離れんと欲せば難修難行を捨て易行易修を取べし。我等濁惡不善にして生死の流れに沈み煩惱の波に漂ひ、業障の繩にまとはれぬれば誰か能く是を救はん。彌陀の願力にあらずばいかで生死の海を渡らんや。假令罪ふかく善根淺くとも願力に乗せ

ば彼土に往生せん。——一毫末斷の凡夫一善不修の惡人なりとも、この本願弘誓の大悲を仰ぎなば一念なを生ず。況や多念をや、これ故に眞實深心に疑ひなく決定して南無阿彌陀佛と稱すれば彼の佛の本願に乗じて往生するなり

と、修するにも行するのにもむずかしい聖道門をすゝめ、最も行じやすく修しやすい、そして誰でも口に佛の御名を唱えることが出来しかも積極性をもつた最高最勝の念佛——選擇本願の念佛をすゝめ、たゞ南無阿彌陀佛と稱へてうたがひなく往生するぞと思ひとりて念佛申せと仰せられたのである。この外こゝでは新らしく數珠を考案なされた。

二

岩付の町を通らばこゝろせよ

人はぬき入れずのはやるに

これは當時淨安寺の門前にはられた狂歌の落書きであつた。元祖法然上人の御影は大てい墨染に五條袈裟をつけ、み手はやゝ胸の中間に右手を高く左手やゝ低くして、兩手をもつて靜かに數珠をつまぐり念佛をとなへて居られる。知恩院にある藤原信實筆の像もそうであるし、當麻奥の院や眞似牛の御像もそうであつた。これが元祖像のスタッフでもある。その數珠は百八顆の一連念珠であるが、それを工夫して二連としたのは、陰陽師で元祖の許に入門した阿波介であつた。四十八卷傳には「かの阿波介、百八の念珠を二連もちて念珠しけるに、そのゆへを人たつねければ弟子ひまなく、上下すればその緒つかれやすし。一連にては念佛を申し、一連にしては數を

とりてつもの所の數を弟子にとれば緒やすまりてつかれざるなり」と記されて居られる。更に新らしくこれに考案を加へて三十六顆に母珠一個を加へた一連と、三十顆に母珠一個を加へた一連とを環貫とし、二條の弟子の緒に十顆と六顆の小珠をつけ、これに鑲を結んで三十顆の方へ遊動するようにした人は稱念上人であつた。その頃上人は岩槻の淨安寺に住んで居られた。岩槻は南埼玉城下町で、當時上人は自行をはげますために常に貫輪を肌身はなさず又手より離すこともなかつた。そのため何時か上人の徳を慕ひ、見做つて數珠をもつもふえ、遂にはこの數珠をもたないことすら恥と考へるようになった。數珠をもつことがこの町にはやつた。誰もがそれを手にしたのだつた。

三

天文十年（一五四一）淨安寺を去つてからは、一度は江戸に歸り櫻田に木内宮内少輔の歸依をうけて天智庵を創め、三年ばかりは此處に居られたが、世間の名利につきまといわれることを厭いて隱遁の志をいだき、後は念譽一傳に托して天文十三年の春諸場行脚の旅にのぼり、先づ路を東海道へと西にとつた。

東海道といつても、この頃は江戸時代の道のように未だとゞのつてはいなかつた。たゞ道から道への連續にすぎなかつた。しかし、求めて得ざるものを求めんと響の音に應ずるようにならぬの如き罪深きものを助け給へ」と申し出られた道俗も少くはなかつた。そこで人毎に念佛をすゝめ、途中相模では西林寺、佛導寺の草庵をいとなみ、駿河では吉原に稱念寺を、伊勢路に入つては伊勢大神に念佛

の弘通を祈り請はれて松坂の樹敬寺に入り、翌十四年正月下旬の頃から念佛の傍ら大原問答を講説たされた。時に集まる僧俗二千になん／＼としたと云うから、その盛況は想像にかたくない。伊勢での掛錫は三年足らずの月日ではあつたが、其の感化は大きなものがあつたやうで、幾つかの寺院も建てられ念佛の風に浴する人も多かつた。

上人の態度としては純一無雜に彌陀に歸したてまつり、欣求淨土にあまりにも徹底的であつた。寺を建てるにしても「寺院は北に門を設け南に向いて入り、佛殿は西にありて東に向いて建立すれば參詣の道俗をのづから西に向かいて拜するに便りあり」と申されて居られる。かくて多くの道俗の懇望もあつたが、長がの逗留はその本意ではないとして、門下の稱憶能信等をつれて同じき十六年の春自から笈を負ひて鈴鹿山によじのぼり、皇居を拜して法樂をさゝげ一途に歩を京へと急いだ。京ではしばらくの間は黒谷にとゞまつたが、ついで知恩院に詣り祖廟に七日通夜して、念佛の弘通せんことをお願ひした。

四

京都では黒瀬某の全幅の歸依をうけ、願主道圓は勝地をえらんで鞍馬谷野中に專稱庵をいとなみ捨世一派の軌則を立てた。十七年の秋には東山の祖廟の南隣りの地に草菴——一心院を結び、稱名晝夜を分つことなく、そこでの生活は往生淨土の希望にもえ、その精進にかゞやいていた。時に上人三十六歳の時である。上人の道心堅固とその主張は同行間の警鐘となりひゞき、情眼から覺醒させたのであ

つた。「宗祖にかへれ」の言葉は遂に上人によつて唱へられ、上人につて實行されんとしていた。「念佛道場七箇條」「專稱庵同行衆法度事」「正朔の別行十一箇條之事」「專修同行者持べき條々」はその結果出來たもので、宗侶に喚起を與へた規則である。その中「念佛道場七箇條」には

一、世間の名利を稀望せず、偏に出離の要法を専らにすべき事
一、當院居住の仁者に於ては交衆を除かるべく、但勤行專一たるべき事

一、酒肉葷辛は佛制の故に門内に入るを許さず、況んや之れを用ひんやの事

一、殺盜姦妄は梵網所説の四重の禁なり、別して當院の別時道場に於ては屹度堅固に相い守るべき事

一、晝寢を致すべからず、但し自然の病患を除く。其餘は長く禁止すべき事

一、假令自ら道理ありと雖も他に對しては論致すべからざる事
一、歌舞管絃高笑雜談は之を禁ずる事

と示されていた。全く覺醒への鐘であつた。或時は五條河原の龜人をあわれみて、十念をさづけ衣食をあたへたこともあつた。天文十八年の春には郷土中路一岐が桂川に極樂寺を、武士の河村與三左衛門高雄は淀納所に念佛寺を、農民三牧勘兵衛尉は田井に專念寺を建て、上人を迎へて開山とされた。又義俊准后は北山の麓に退いて阿字觀をこらしていたが、淨土念佛の法門を聞かれて自からの御殿を上人に進めて嵯峨に稱念寺を創め、同じき二十年には下嵯峨に正定院が、二十一年には塚原稱念寺と葛野廣見寺が建てられる等、數多寺院の草創があつた。傳ふる所によれば關の東西を通じて四十七箇

寺あつたとさへ云はれている。誠に上人の感化大なるものがあつたのである。

五

知恩院は草創以來幾く度びかの回祿にあい、永正十四年八月にはまたもや一山は火焰につゝまれた。永享の回祿以來僅か七十年ばかりの間に應仁、永正と三度も兵火をこうむつたのである。應仁の亂は京の町を焼野原に化さしめ、時人をして「都は野邊の夕ひばり、あがるをみても落つる涙は」と悲歎にくれさせたのであるが、この度びの兵火もたゞ同じ想いをくりかえすばかりであつた。しかし佛天の加護にもよらうか。元祖法然上人の御影像はそのたび毎に餘焰をまぬかれ「佛閣僧寮の損亡を悲しむと雖も、本尊影像の餘焰を免かるを喜ぶ」(再興勸進帳)とその無事なるをお互に喜び合うのだつた。御影堂はそれから十四年の後享祿三年(一五三〇)再興成つたが、上人は天文廿二年同法百二十余人と誓書して、再興成つた御影堂の元祖の影前で毎月廿四日の夜別時念佛をつとめた。又傍ら全國に募財して御影堂を瓦葺に改めもした。その勞苦はなみ／＼ならぬものがあつたであらう。

上人にして見れば、ひたすら名利をはなれ五欲をたつて、俗化した紫香の色をのみほこる香華院を脱して、靜かなところに寺院をいとなみたいと念じ、唯一向に急佛申して元祖立教の昔にかえらんとつとめた。「形は剃髮染衣しながら、心は五欲の境に馳、かりなる名利を悦びて、美服滋味を好み、住處を華麗に」することを極力いましめたのであつた。されば上人のこのような態度に歸依渴仰された僧尼民衆も多かつたようで、「徒弟日々におほく、清衆日々にあつまりておのづから一家の風儀をな」し、世の人は呼んで捨世流儀と貴

んだと云うことである。

寧日なく唯一途に念佛弘通のために一身をさへげた上人であつたが、天は年をかさなかつた。翌二十三年の七月十九日春秋僅かに四十二歳の若さで、これから爲すところあらんと期待せられて居つたにもかゝらず此の世を去られてしまつた。今十年、二十年康存せられたらと思うのは私一人ではあるまい。まことに短い人生であつた。しかるに後人に残された業績はあまりにも多かつた。そして教化の傍ら筆をとられた著書に安心鈔、要義鈔、夢記、法然上人傳、選擇集講稿各一卷があつたらしいが、前二書は失はれて今拜見することは出来ない。

六

この外上人には「長短二轉の念佛」とか「唱不唱の念佛」とか云う念佛法があつたと、愚屯の「忍辱雜記」に記して居られるが今は知るに由ない。誰かこれについて知る者があつたら御教示願いたいと思う。

上人がみまかりましてから、丁度明年は四百年の忌辰を迎へる。上人が在した頃を思ひ出して見ると、大永三年(一五二三)には知恩院と百萬遍知恩寺が各々その正統について本末の争ひをおこし、爲めに永正十四年の回祿にあつた知恩院の再興も意の如くならず、十年以上も長が引いてしまつた。世は又戰亂がいきもきらずしきりにおこなわれた。そして民衆は不安のどん底におとし入れられていた。今の世相とくらべて見て、うたゝ感無量なるものがある。

黃昏も近くなつたので吉田御住職に明日の瀬谷への連絡をお願いして再び祖廟に詣り、下山して歸途をいそいだ。さしもの東山も閑散としていた。(昭和廿七・正・廿五日稿)

吉田絃二郎・作

京の時雨

時

高倉天皇の御代承安治承のころ

場

所 京近き里

登場人物

天野四郎(耳四郎、後に教阿彌陀佛)

三十五六才

若き僧一

阿 萬 四郎の妻

二十四五才

四郎が子分 一

津の三郎

二十八九才

同じく 二

和藤武右エ門

十八九才

同じく 三

和藤庄司 武右エ門の叔父

五十才くらゐ

博 勞

法然上人

四十二三才

その他僧、酒を飲む男など

老いたる僧

七十才くらゐ

第一場

京よりや、離れたる山中の隠れ家。春の夕暮

「S.E(音響効果) 鶯が鳴いてゐる」

三郎 花が散る 鶯が鳴く(感慨深げに) 阿萬お前は昔のことを思ひ出さぬのか。

阿萬 昔のゆめをくりかへしたつて仕方がないぢやありませんか、早く歸つて下さい。今日あたりあの人はいかに戻つて来るにちがひありませんから。

三郎 四郎が戻つて来たからつて、何も恐がることはいではないか。

阿萬 あなたがこんな山の中の隠れ家をさがして、逢ひに來たと知つたら、あの人はいどんなにあたしたちを疑ふか知れません。四郎が戻らないうちに早く山を下つて下さい。

三郎 あのところの二人の心をお前は忘れたのか、津の國から丹波境のこの山中まで、さがしさがしてやつとの思いでたづねて來たものを、やさしい言葉一つかけてくれるではなし。

阿萬 後生です、四郎はどんなむごいことをしようも

知れませぬ、三郎さん早く逃げて下さい。

三郎 四郎が熊野沖で海賊を働き、京難波あたりで大盗人になつて
いるらしいといふ事は聞かぬではなかつたが。

阿萬 もうこれまでに、どれだけ人を殺したか、自分でもかぞへき
れないといつてをります。

三郎 わしもお前の目の前で、四郎の手にかゝつて死ぬれば本望ぢ
や。阿萬、お前はあれほどわしを思つてゐたのではないか、
それに、なぜ四郎といつしよになつたのぢや。

阿萬 そりや、無理なおたづねです。あの年頃の娘には、自分で一
生のつれあいを選ぶほどの賢さはございませぬ。四郎は根強
く、母にあたしをくれと申してまいりました。あの恐ろしい
源平の戦さのさなか、父は野武士のために殺され、母一人子
一人のあたしたちは、生きた心地ありませんでした。四郎
は父の仇を討つて、狩衣の袖に首をつゝんで、たづねて来て
くれました。

三郎 その恩にほだされたというのか？

阿萬 あなたはあのころから。

三郎 戀にも戦にも臆病であつたといふのであらう。ではわしが今
お前といつしよに死のうといふたら、阿萬、お前は

阿萬 あたしは四郎の妻でございます。

三郎 大盗人を夫に持ち、隠れ家から隠れ家へと、明日をもさだめ
ぬ淫き草のやうな暮しをしても、お前は四郎を憎む氣にはな
れぬらしい。

「E
S.E

山風の音」

日も暮れてきた。あゝ今日は歸るとしよう。

阿萬 ……(泣く)

(間)

三郎 誰れか人が。

阿萬 人が(と、ひどく驚き)あの人が歸つて來たのです。早くか
くれて下さい。

(四郎 登場)

四郎 阿萬、燭もつけないで何をしてゐる、誰れだ、そこにゐるの
は？

三郎 わしだ。津の三郎だ。

四郎 津の三郎つ？

三郎 おどろいたであらう。

四郎 おどろく？ ワツハツハツ、どうせ一人の女に未練を斷ち切
れぬお前のことだ、いつかは阿萬をたづねて來るであらうと
思ひ、待つてゐた。

三郎 言ふな四郎、お前はおれにたづね出されるのが恐さに、この
やうな山の中へ阿萬をつれて隠れてゐたのぢや。

四郎 自分相應なことをいひをる。三郎、お前、そのやうに阿萬が
欲しけれや、阿萬をくれてやらうか？

三郎 何だと？

四郎 その代りに、お前の命と引き換へだ。

三郎 それが恐さに、手を引くと思ふか。

四郎 今日はともかくもう歸れ。

三郎 歸らいでか、だがまたたづねて来るぞ。

(と行きかける)

四郎 三郎待て。

三郎 何の用だ？

四郎 一度おれの棲家を知つた奴をそのまゝ生かして歸すわけにはゆかぬ。

三郎 殺すといふのか、仕方がない、殺されよう。おれはおとなしく殺されよう、のう、阿萬。

(阿萬はじつところへてゐる)

四郎 お前のその坊主見たいな生悟りの顔つきが、おれは昔から大嫌いだつた。

三郎 四郎、早くおれを殺さぬか。

四郎 殺してやる(と近づく)しかし、こゝでお前を殺したら、あれ天野四郎は、津の三郎に女を奪はるゝが恐さに三郎を殺したなどといはれるのも口惜しい、今日はそのまゝ。

三郎 歸れといふのか、だが四郎、生きてゐるかぎりおれは幾度でも、お前らの隠れ家をさがし出して阿萬をたづねて来るぞ。

四郎 よし、幾度でもたづねて来い。そして阿萬が奪れるものなら奪るがいゝ、さう聞いては、いよいよお前は殺されぬその代りお前が一度たづねて来る毎に、おれはお前の指一本をへし折つてやる。おれは今朝から一度も血を見ない、おれは血を

浴びない日はさびしくてならぬ。

三郎 それでおれの血を浴びたいといふのか。

四郎 おう、三郎、あつちへ来い。

三郎 おう、どこへでも行く。

阿萬 あなた、ひどいことをなすつてはいけません。

四郎 だまつてゐろ、えいッ。

(と阿萬を突きとばす、阿萬はうなり聲を立てゝ倒れる。四郎は三郎を連れ出し、捻じ伏せ、とゞ三郎の

指一本を食ひ切る、四郎戸口にかへつて来る)

四郎 あいつの指を一本食ひ切つてやつたが、あいつ執念深い奴だな。ぬらぬらして氣味がわるい。ベッベッ(と口中の血を吐き出す)

(子分三四人走り登場)

子分一 頭、そこにおゐるか。

四郎 あ……みんなかへつて来たか、それで何うだつたな？

子分二 やつぱりあの男は、丹波荒部の郷の大富限者で。

四郎 そしてあの男の名は和藤丹治左エ門といつただらう。

子分三 頭はどうしてそんなことまで、知つてゐなさるのか？

四郎 今日、お前たちと一緒に鷹ヶ峰の松山の中で、晝寝をしてゐた時だ、あの下の道を通つて行つた小荷駄の人足共の話聲が耳についたまでだ。

子分二 あの松山から丹波道までは五六丁も離れてゐますに。

四郎 お前はわしの耳を忘れたか。

子分一 なるほど頭は恐ろしく、耳がさといので、耳四郎親分だの地獄耳の四郎親分だのと仲間ではいうてをりやすなハ、ハ、ハ、。(他の子分たちも笑ふ)

四郎 どうしたわけか、わしは餓鬼のところから人並はづれて耳がさとか、静かな夜など、七八丁はなれた土藏の中で金銀をはかる音さえ聴き取るやうに生みつけられた。ありがたいやうでもあり、うらめしいと思ふこともある。こんなさとい耳さへ持たなんたら、熊野沖で海賊を働いたのを手始めに、幾百人といふ人を斬つたり、殺したりするやうな大悪黨にもならないですんだやも知れぬ。ハ、ハ、ハ、ハ……(寂しき笑ひ)で、和藤丹治左エ門が屋敷も見届けて來たな。

子分三 そこにぬかりはござんせぬ、この峠を三里下ると荒部の郷です。郷の入口の、破れ寺を右に見て三四丁もいつたところに石垣をめぐらした城のやうな屋敷があります、倉も十戸前から並んでをり。

子分一 腕つぶしの強さうな用心棒も七八人はをりさうです。

四郎 それぢや幾らか手應へのある仕事もできようといふものだ。今夜は先づおれの家でゆつくり前祝ひに一杯。

子分たち 頭、ありがとうござんす。

阿萬 (正氣つき) あ、痛、痛。

子分三 姐さんそんなところで何うなさつた。

四郎 さつき、邪魔だつたので、少し眠らして置いたまでさハ、ハハ……

阿萬 あ……痛……そしてあの人は歸つてゆきましたか。

四郎 三郎か？ 歸つて行つたよ、そこいらにお前にといつて置いて行つたものがある。(子分に向かい)おい、お前たち、阿萬に燭を見せてやりな。

子分三 燭でございますか(燭を点し)はいはい姐さん、燭です。

阿萬 何ですか、三郎さんが置いて行つたものつて？

四郎 さがして見な。そこいらを、三郎が指だ。

阿萬 えッ、三郎さんの指を切つたんですか。あなたはひどいことをなさるのねえ。

四郎 たかが三郎が指一本ぢやねえかハ、ハ、ハ、ハ……

阿萬 可哀想にあの人は……

「S.E

山風の音」

第二場

第一場より数年の後、黒谷の堂、老若の僧等堂に集まつてゐる。

「S.E

遠く木魚の音」

若き僧一 今日こそお上人さまが、この御堂へお出ましになるような氣がいたし、わたくし共は、これに參つてお待ちいたしました。

老いたる僧 わたくしはこの二三日、この黒谷の空を掩ふて、毎日紫の雲のたゞようを見まして、この胸にびたりと感ずるものがござりました。これは九年前、この黒谷におこもりなされた法然上人さまが、今こそ悟りといふ悟りの奥をお聞きくだされたにちがいない。老い先短かいわたくしも上人さまのお悟りの道を聴聞いたすことができますかと思ひ、足を空に駆けつけましてござります。

「S.E

遠くに聞の聲聞ゆ 人々のざわめく」

法然 あゝの騒ぎは何ぢや？

若き僧二 また叡山の荒法師共が強訴へ出かけたのでございます。

法然 そんなに度々か。

老いたる僧 仁安二年二月この方、度々のことであり、殊にこの黒谷邊はいつも戦さの巷になりましたに。

若き僧一 上人さまにはこの御堂におこりなつたまゝ、九年が間

一切經堂から一步も外へはお出ましになりませんでした、それが、それではあの恐しい源平の戦ひもご存じなく。

法然 私は何も知らなかつた。さういへばいつであつたか、一切經堂の階きざしの下に二人の武士が果し合ひをして、たがひに刺しちがへて呻うめいている聲を一度聴いた。その聲を聴くとわたしは一切經堂の扉を破つて、二人の武士に末期の水の手を向けようかと思つたこともあつた。わたしは悟りを開くまでは二度と出まいと決心した扉を破つて、二人の武士の間に身を投

げ出さうと思ひ扉に手をかけた。

老いたる僧 では、あなたさまはどうとう。

法然 いや、扉に手をかけた殺那わたしに心に疑いが起つた。二人の武士は呪ひ憎み憤り、つかみ合ひ、わめき合ひて死んでゆく、修羅のあさましさだ。しかしわたしは二人の武士の妄執の炎を消す一碗の水も持つてはおらぬ、わたしは呻きながら死んでゆく二人の武士に、無智下根の身の唯一の手向けとして、その日から更に、一切經をくりかへして讀誦した。

老いたる僧 そしてお悟りを。

法然 いや、たゞ法然が身の愚痴をなげくばかりぢや、或る時は一切經堂に跌座してわれとわが身を。

老いたる僧 えつ、何と仰せられます。

法然 いや、死ぬるまではと思ひつめ、この九年の間に一切經四度五度とくりかへして讀んだ。

老いたる僧 そして最後のお悟りは？

法然 悟りなし、たゞ愚痴にかへりて、一切を阿彌陀佛におまかせいたすばかりぢや彌陀の（天野四郎弟子たちの間にまぎれて熱心に聴き入る）慈悲は廣大無邊、三千大世界を掩ふ、木こり、草狩り菜つむ女水くむ男の一文不知なるも捨て給はず。

若き僧一 でもわたくしのやうに善根なき者は。

法然 善根なければとて往生を疑ふてはならぬ、御佛は五逆極重の罪人をも捨てはなさらぬ、御佛の慈悲の網の目を洩るゝほどの罪はない。

老いたる僧 然らば善惡の差は？

法然 御佛の慈悲の眼には、善人もなく、惡人もなし、たとへ人千人救ふたればとて、御佛の大悲の前には何の善であろう。いかなる大惡人も眞心念佛申さば、往生疑ひなし。

(天野四郎人々をかき分け法然の前にひざまづき)

四郎 お上人さま、お上人さま――

法然 お前さまは、どなたぢや？

四郎 お上人さまわたくしをお救ひ下さい。わたくしは天野四郎と申す大盜人でございます。實は今夜、四條あたりのさる町家へ忍び込むつもりで、日の暮れるのを待つために、あの、裏山の地藏堂に、かくれてをりましたところ、お上人さまのありがたいお言葉がわたくしの耳にはいつてまいりました。

老いたる僧 裏山の地藏堂まではこゝから大分はなれてゐるに、お言葉が聞えたとは？

四郎 わたくしの耳のさといひことは、盜人仲間でも唯一人知らぬ者としてはございませぬ、七八丁はなれたところでも人のさゝやきを聴き取ります。

老いたる僧 (あきれて) さても珍らしい耳だ。

四郎 この耳のさといばかりに、かずくの惡事を働いてまいりましたが今日といふ今日生まれてはじめて、この地獄耳が極樂淨土のお言葉を聴き取りましてございます。お上人さま、わたくしのやうな大惡人でも往生がかないませうか。

法然 往生は一定ぢや。

四郎 でもわたくしは幾百人と知れぬ罪なき人を殺してをります。

わたくしの罪業はあまりにも重うございます。

法然 罪業の重ければこそ本願の船はある。たとへば重き石も船に載すれば沈むことなく万里の海をわたる。お前さまの罪業重きこと石のごとしといへど、彌陀の本願の船に乗れば、生死の海に沈むことなく、必ず往生すること疑ひなしぢや。念佛を唱へ一念發起すれば、百千の罪業滅する。

四郎 ありがたう存じます、わたくしは發心致します。二度とあの恐ろしい罪業は犯しませぬ。お上人さま、どうぞわたくしをお弟子の一人にお加へ下さい。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛

法然 お前さまは今日からは教阿彌陀佛と名乗らるゝがよい。

四郎 教阿彌陀佛……はい、はい、ありがたいことでございます。

(間)

法然 南無阿彌陀佛。

老若の僧等 南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛 々々々々々々々々。

(つづく)

淨土シリーズ

大野法道著

五重の話

文庫版四頁。一部二圓、百部以上一・八圓
三百部以上一・五圓。 五十部毎八圓
五重の話がわかりやすく説かれ五重宣傳
用に施本に最適

參詣手帖

お塔婆、お墓、位牌、お珠數、法事につ
いて知らねばならぬ信徒常識

一法然上人續仰會一

芝園だより

◎編集が順調にすすめばすすむ程に、後記を書くことがむづかしくなる。二ヶ月先の季節感覚を持たねばならぬからである。四月の春にいて六月の夏の感じを出させることは、以つて生れた凡庸のよくするところではない。

◎だが、それにもまして、とに角に、順を追つて次々に送り出し得る本誌を、是非、御愛顧下さい。

◎心づかぬままに、浄土執筆陣が大きく回轉しているようである。このことは、本誌のためには発展であるうが、その人自身にとつては停滯ではなからうか。敢えて暴言を吐いて、叱聲に代るに協力を待つ次第である。

◎眞野先生は六月二日から連続五回にわたつてNHKより放送される。

◎訪問記仲々の好評。偏えに龍海

氏の奮闘のたまものであるが、どうか、皆さんも御紹介、御仲介の勞をお願いして、どしどし御投書下さい。

◎信仰は生活と一枚のもの。生きた宗教は、結局生きた人の口から語られる。

◎最後に、私事一つ。小生おかげで一年ぶりに、やつと半人前にもどつて、糞尾に附してふんとうしたく、何とぞ、お手やわらかに御引まわしのほど、お願い申し上げます。(竹中)

◎五月一日暴動、暴力殺生全て我等の敵。しかし此頃は言葉の綾がやゝこしい。祖國はソ國に通じ、再軍備反対は人民軍武装に、平和は革命に、アメ公歸れは解放軍來いと同義語だ。深く東洋に根を下して世界の新しい心の源たる事を期待される佛教は、今まで、かゝる物質的、社會的、政治的な面から超然としてきたし、又それ故に

動亂の世の最後によるべとなつたのだ。しかし其は其として、このやゝこしい社會の中に教を見出さねばならない。

◎五月四日、故藤田寛雅氏一周忌が鴻巣勝願寺で行われた。由佳ちやんも元氣で大へんうれしい。後は御令弟寛海氏がやつておられる。本誌へも今後御協力下さる。本誌はその手初めという所。

◎正大入學者は昨年の一・五倍、佛教學部では宗學關係が多い。

◎奥多摩の新緑を分け入つて悟堂先生を問う。農家の一室にて、白髮の老師鳥を語る。假寓の話を聞けば、鳥を相手の先生が、鳥の研究所を建てようと家財を投じられた資金を失敬した奴がいるのだ。此點でも人より鳥に軍配が上げられる。全くの「鳥の人」である。創立以來の會員小樽市直行寺様等近頃編集部を訪れる方多く大いに力強けられる。

(龍海)

維持會員芳名(敬稱略)

水野 秀雄(東京)
桓 内 肅(東京)
豊 島 恒 造(東京)
誌上厚く御禮申し上げます。

誌代

會費半ヶ年二百圓、一年四百圓(〒共)毎號定價三十圓〒四圓、前金切次第清算通知申し上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「浄土」 六月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿七年五月廿五日印刷
昭和廿七年六月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番
電・芝(四三)一三二八
會費部B一〇八〇一四

御袈裟法衣御調進

- 錦金襴
- 特種織物
- 御水引
- 御打敷
- 御幡
- 稚兒衣裳

御法要に梵鐘供養に新装の稚
兒貸衣裳を精々御下命の程を

増上寺
宗務所
大正大學
芝中高校
淑徳學園

御用達

野村法衣店

東京都港區西久保巴町一〇六
電話芝(43)〇四二八番
振替東京七八九四五番

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十七年五月廿五日印刷 昭和二十七年六月一日發行

第十八卷

第六號

本會代理
責任取次

F. F. D. 幻燈機

F. F. D. 株式會社
東京都港區七
芝田村町三ノ七

.....スライド映寫機(幻燈機).....

◎ミナシキ58型B ¥12,880.送料¥500. ◎マスターS50. B型 ¥11,880. ¥500.

.....スライド(フィルム).....

- ◎玉虫の厨子物語—法隆寺にまつはる愛と藝術の悲しい物語 ¥ 460
- ◎早耳のうさ吉—早耳で得意のうさ吉が早耳の爲大失敗 ¥ 430
- ◎おしやかさまシリーズ—全五巻、釋迦の降誕から一生描く 各¥ 430
- ◎白像の村—戦火に追はれ砂漠をさまよう人々を救う白像 ¥ 460
- ◎二宮尊徳—貧しき農民のため困苦とたたかう尊徳先生 ¥ 460
- ◎アルプスの娘—ヨハンナスビリ作、汚れしらぬ娘ハイジのも
のがたり二巻 各¥ 430
- ◎ビルマの豎琴(前、後)—文部大臣賞を得たビルマの豎琴のスライド化 各¥ 430
- ◎母を尋ねて—母を尋ねて三千里、海越へ山越へ少年マルコの話 ¥ 430
- ◎幸福の王子—寶石と金で作られた幸福の王子が人々を助ける ¥ 460
- ◎白雪姫—美しい白雪姫がさまざまの苦勞が幸せになる ¥ 430

其他—作品300種、在庫豊富、目錄進呈致します。

定價金三十圓(送料別)